

筆を持った政治家

たけごし

よさぶろう

竹越 與三郎 (1865-1950)

漢学・西洋文明を学ぶ

竹越與三郎は、1865年（慶応元）に父の出稼ぎ先である埼玉県本庄町（現・本庄市）で、柿崎村（現・柿崎区の一部）清野家の次男として生まれました。幼少期を柿崎村で過ごした與三郎は、早くから漢学を学ぶなどその才を発揮し、小学校の課程が終了した後、兄清野迂策の薦めもあって1880年（明治13）に上京、福澤諭吉の慶應義塾で英語やキリスト教、西洋文明などを学びました。また、この頃叔父である竹越藤平の養子となり、竹越與三郎となっています。

言論人として、政治家として

與三郎は慶應義塾中退後、福澤諭吉に認められ「時事新報」発行に協力、また、宗教・哲学・思想の著書を発表したほか「六合雑誌」に寄稿するなど、言論人としての土台をこの頃築いています。

その後、数多くの執筆活動で政治に関心を寄せた與三郎は政界入りし、1902年（明治35）に行われた第七回衆議院選挙に見事初当選しました。以後、1915年（大正4）に落選し政界を引退するまでの5期13年間、教育・軍備・経済問題などに取り組み、頻繁に意見を新聞紙上に発表しています。

また、與三郎は、本野一郎や池田成彬と日本経済史編纂会を興し、1920年（大正9）に5年の歳月と心血を注ぎ込んだ、全8巻5600ページにもなる大作『日本経済史』の刊行につなげ、日本経済史学確立の礎石となったのです。

死ぬまで筆を休めず

與三郎は、政界引退後も大阪毎日・東京日日新聞客員として活躍したほか、『日本の自画像』『倭寇記』『新日本史』などを次々と著しています。明治維新後の揺れる時代から昭和初頭まで、政治家としてだけでなく、文明批評家・歴史家としてもその名を馳せ、死ぬまでその筆を休めることのなかった與三郎でしたが、多くの著作を残す中、1950年（昭和25）にその長い生涯を閉じ、筆を置くことになったのです。

残された著作は海外を中心に高い評価を受け、死後50年以上経過した今日に至っても、イギリスの出版社から1930年（昭和5）に出版された『日本経済史』の英訳本を再出版する依頼が寄せられています。